

## 「女三の宮の幼さ」について：若菜上巻の読みの試み

伊佐山，潤子  
鹿児島女子短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/8904>

---

出版情報：語文研究. 100/101, pp.38-49, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 「女三の宮の幼さ」について

——「若菜上」巻の読みの試み——

伊佐山 潤 子

はじめに

女三の宮が論じられるとき、まず例外なく言われることはその「幼稚さ」である。時に彼女に好意的な内容が書かれることがあったとしても、その点は変わらない。さまざま論考に「思慮に欠ける、才気に乏しく幼稚、異様な幼稚さ、たよりない幼稚さ、幼稚で魅力に欠ける、精神的に幼い、未熟、劣弱、性格的に頼りない、あまりに幼い、極端な幼児性、空虚な人格」といった表現が散見される。

登場してからそのイメージが定着するまでという観点からと、結婚問題にひと区切りがつくという点の両方から、「若菜上」巻冒頭から紫の上との対面の場面までを見てみると、

女三の宮は確かに「いはけなし」「何心なし」「かたなり」「小さし」など「精神的・肉体的未成熟を語る言葉で、<sup>(注1)</sup> 囲繞されているように」ある。彼女を取り囲んでいることは次のようなものだ。

いはけなし	8例	(A)二〇八 (B)三二九 (C)二四〇 (D)二四〇
何心なし	2例	(E)二四四 (F)二四七 (G)二四九 (H)二六〇
かたなり	1例	(I)二二三 (J)二四七
かたおひ	1例	(K)二四〇
小さし	1例	(L)二二三
幼し	5例	(M)二四〇 (N)二二六 (O)二四七 (P)二四八 (Q)二四八
幼げ	3例	(R)二六一 (S)二四六 (T)二五七 (U)二六〇

若ぶ 1例 ㉔四〇

若し 3例 ㉔二二三 ㉔四六 ㉔四六<sup>(注)</sup>

これ以外にもしばしば引用される、乳母の「あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせ給」などの表現もあつて、女三宮の「幼稚さ」は動かし難いものに見える。

だが、それは本当に動かし難い事実なのであろうか。

まず問題なのは、「若菜上」巻には「若紫」巻にあつたような、女三の宮の「幼稚さ」を証明するような具体的描写が一切ないことである。「若紫」巻には泣いて顔を赤くしている姿(一五七)、大人の困惑をよそに遠慮ない口をきく様子(二八一)、眠たいとだだをこねる場面(一八五)など、紫の上の子どもらしさを具体的に生き生きと描いたところが何箇所もあつた。ところが、女三の宮についてはこのような描写はまるでない。つまり、なるほどこのありさまでは「幼稚」と言われても仕方ないと読者が納得できるような、すなわち「幼稚さ」の根拠となるような事実は作中にはひとつも描かれていないのである。にもかかわらず、先のようなことが従来言われ続けてきたのは、ひとえに「いはけなし」以下のことばを拠り所にしたものと思われる。

ところがここには問題がある、先の二五例の語のうち、明らかに地の文で用いられているのはわずかに二例(㉔E)(㉔R)。

それを除く残り二三例はすべて会話文中か、消息文、心中言にみられるもの、あるいは誰かの視線を通して書かれた文中にあるものである。そして、これらの語の使用者は登場人物中の四名に限られる。

朱雀院 (A)(B)(G)(I)(L)(N)(P)(Q)(W)

乳母 (H)

光源氏 (C)(D)(F)(J)(K)(M)(O)(T)(V)(X)

紫の上 (S)(U)(Y)

さてこの四人の言うことは間違いない事実なのであろうか。実は、この四人には共通項が二つあつて、それぞれの言うことをそのまま信じるわけには行かないのである。

まずひとつ、これらの人物は皆三十代、四十代に属しており、女三の宮の親または親世代の人間であること。一般的に言つても、親は我が子を実際より幼いと思つてゐる、あるいはいつまでもそのように思つてゐたいものではないだろうか。それがかわいがつてゐる大事な子であればなおさらである。また、良くも悪くも正確に子を見ることは親には難しい。さらに、親世代の人が子世代に属する人たちを自分と対等の大人に見る事はまずない。だから、親または親世代の人間がある人物のことを「幼い」と言つたというそのことだけでその人物を「幼稚」だと決めつけるのは危険ではないか。たと

えば「いはけなし」の語について、「赤ん坊から一五、六歳まで、広い範囲に用いられ」、女三の宮の年齢でそう言われども「その限りでは特別異様ことではない」のであればなおさらである。

女三の宮の年齢と、四人の年齢から言つて、これらの人々の目に女三の宮が「幼く」見えたとしても何も不思議はない。先に述べた通り、証拠となり得るような具体的事例が全くなく、検証の仕様がなわけだから、これらのことばだけを根拠にして結論を出すことはできないのではなからうか。

そしてもうひとつの共通点、これは先のよりはるかに重要と思われるのだが、四人それぞれが女三の宮をことさらに子ども扱いする理由を有していることである。

この点について以下順に述べる。

#### 一 朱雀院の場合

朱雀院には娘が四人いるが、「あまたの御中にすぐれてかなしき物に思かじつ」<sup>(1)</sup> いているのが女三の宮である(二〇八)。なぜ女三の宮だけが特別なかという点については亡母藤壺女御との関係から、既に日向一雅氏の論があり、

(女三の宮のために) 格別よかれと計らう行為は…女御

に生前十分に報いる事のできなかつた代償を果たそうとしていることである。朱雀院が女三の宮の結婚に熟慮の限りを尽くしたのも、女三の宮の未熟さをいたわる親としての心情によるだけでなく、「高き位にも定まり給ふべかりし人」であつた藤壺女御の、「つらみたるやう」にて死んだ事への償いであつたからにちがいない。

とされたのであるが、藤壺鎮魂と女三の宮の「未熟さ」を二つ同等に並べられたところには疑問を感じる。亡き藤壺への追慕の念、その鎮魂を願う朱雀院の気持ちを感じるならば、女三の宮を特別扱いする理由はこれ一つだろう。なぜなら、母親に対する感情からその娘を偏愛するのに娘の実態は関係ない、娘の出来が良くてもそうでなくても、どのような娘であつても特別扱いするに決まっているからだ。ここで注意すべきは女三の宮がどんな娘であるかということではなく、朱雀院は死んだ藤壺に対する本心を口に出すわけには行かないということの方である。どれほど藤壺のことを思つていても、その思いが深ければ深いだけ、他人にそれを告げるわけには行かない。三の宮を特別扱いする本当の理由を表に出せないとなれば、何か別の理由が必要になる。そしてまた、女三の宮の相手は最終的に光源氏に落ちつくわけであるが、その際

に若い夕霧や柏木でなく「親さまに」源氏に、との結論に至るためにも、女三の宮の「幼さ」は有効に働いた。

朱雀院は女三の宮のことをひたすら心配していた。

たゞこの御事をうしろめたくおぼし嘆く(二〇七)

「……いとくうしろめたくかなしく侍る」と御目おしの  
ごひつゝ(二〇八)

見捨てたてまつり給はん後の世をうしろめたげに思ひき  
こえさせ給へれば(二一九)

「中にも、又思議る人なきをば、とりわきうしろめたく  
見わづらひ侍」(二二八)

と、「うしろめたし」がたびたび使われている。朱雀院が女三の宮のことをことさら幼い者であるかのように言つのは、女三の宮に対する自分の思いを他人にも共有してもらいたいからだと考えられないだろうか。これは勿論、朱雀院が意図的にしていることではないだろう。気がかりの余りこのような物言いになったのではないかということである。

朱雀院が春宮に(㉖)、乳母に(㉗)、周囲の人達に(㉘)、光源氏に(㉙)、紫の上(㉚)に向かって女三の宮が「幼い」と言つ時そこにあるのは、娘を心配し、何とか力になってやっ  
て欲しい、冷たくしないでやって欲しいと願う父親の情愛であって、これらのことばを字義通りに女三の宮の幼さを表わ

すものとできるだろうか。ここでは女三の宮の実際の姿以上に「幼さ」が強調されているように思えるのである。

## 二 乳母の場合

女三の宮付きの乳母もまた本心を隠している人物である。<sup>(注7)</sup>

この乳母は兄・左中弁と共に、女三の宮と光源氏を結びつけようとしている。その理由について、久保重氏は次のように述べられた。

この乳母の望みは、わが姫君が、至上の男性源氏と結婚し、最高に幸福な安定した生涯を過ごすことにある。その並ならぬ情熱の源は、養い君に寄せる溺愛の情と、自身の競争心とから、朱雀院が四人の内親王のうち女三の宮だけを偏愛するのを妬む他の姫君の乳母らに見せつけるためにも、わが養い君には、「いかに塵も据ゑたてまつらじ」と力む乳母根性から発している。<sup>(注8)</sup>

ここでこの乳母が女三の宮を大切に思っていないなどと言いたいわけではない。藤壺亡きあと、母代わりに大事に育ててきたのは間違いないだろう。ただ、利己的な部分が全くないと言いきれるかどうかが問題なのである。この乳母、一点の曇りもなく姫君御大切なひたすらなる忠義者であるうか。藤

本勝義氏は「女三の宮の」降嫁によって自らの利益を増し、権勢をより拡張し、榮達せんとする思惑が読みとれ、「女三の宮の将来のことだけを考えていたとはとても思われな」とされた。<sup>(94)</sup>なるほど、乳母が左中弁に言つ

御子たちは、ひとりおはしますこそは例の事なれど、さまぐくにつけて心よせてまつり、何事につけても御後見し給人あるは頼もしげなり。上をおきたてまつりて、又、真心に思ひきこえ給べき人もなければ、おのらは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕へにかあらむ。…ご覧する世に、ともかくもこの御こと定まりたらば、仕うまつりよくなんあるべき。(二二五)

にはお仕える者の本音が見える。後見人がいて「頼もしげ」なのは女三の宮だけではないのだ。

一生独身で過ごすという内親王の生活がこの先何年続く事になるのか、その静かさ、寂しさ、張り合いのなさ、それよりも、誰かの奥方様になられた女三の宮にお仕える方が余程お仕への甲斐があると考えたとして、一体誰がこの乳母を責められるだろう。そして、その誰かは光源氏であれば良い。六条院には兄がいるのだから、二人でこの縁組をまとめられたら、兄妹は朱雀院からも源氏からも感謝されることになる。単に面目を施すだけでなく、種々現実的な恩恵に与るであ

らうことは想像に難くない。そこで朱雀院に言つ。

姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせ給ふに、さぶらふ人々は、仕うまつるかぎりこそ侍らめ。…とりたてたる御後見ものし給はざらむは、猶こころばそきわざになん侍べき(二二七)

ここにもお仕える立場からの言い分があるし、また「こころばそ」いのは女三の宮だけでないこともうかがえるのではないか。

さて、ここにある「あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせ給ふ」が事実ならば、これは大変な発言ではなからうか。そのように育ててしまった責任は誰にあるのだろう。従来これは事実と解されてきたわけで、朱雀院の教育不足<sup>(注10)</sup>や、朱雀院と乳母・女房による教育の質に原因を求められるとされてきた。<sup>(注11)</sup>また「女三の宮が未熟であるがゆえに、乳母は自らの責任回避のために、女三の宮の「後見」の決定を切望する」とも言われている。<sup>(注12)</sup>そこから、乳母は「兄の左中弁にも女三の宮の欠陥的人間像は秘して事にあたらせたとおぼしく、兄を「いわばたばかつたといえ」、「女三の宮の異様な幼稚さを思えば、託された光源氏こそ被害者」との読みも出てくるのである。<sup>(注13)</sup>しかしそれにしては乳母は平然と話しているようだし、朱雀院もまたこの乳母を叱るでもなく責めるで

もなく、このまで娘を悪く言われていることに全く注意を払っていないようである。

ここで注目したいのは森一郎氏がこの場面について、「朱雀院と乳母の呼吸」が合っているというか、根本的には朱雀院の思念が軸であつて、乳母はそれに呼吸を合せているというべきだろう」と述べておられる点である。これは別々の動機から出発しながら二人が期せずして同じ到達点を目指していたからと考えられないか。

朱雀院も乳母も二人ともが女三の宮の結婚を望んでいる。現実には女三の宮が「幼稚」だと思つてはおらず単にそれを口実にしているに過ぎないのであれば、ことばの上だけでどれほど女三の宮が悪く言われようととも気にもならず、会話は進んで行くのではないかと思われる。ここで二人にとつて何よりも重要なのは女三の宮を源氏と結婚させることであるからだ。

以上のような点からここでもまた、乳母のことばをそのまま受け取るわけには行かないようである。<sup>(注1)</sup>

### 三 光源氏の場合

これも度々言及されていることながら、源氏が女三の宮と

一緒になる気を起こしたのは、彼女が藤壺の姪であつたらだ。<sup>(注1)</sup> 左中弁と話している時に

「この御子の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけぬ。さしつきにはいとよしと言はれ給し人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮、をしなへての際にはよもおはせじを」などいぶかしくは思きこえ給べし(二二四)

と心が動き、のち朱雀院と対面した時も、「御心のうちにも、さすがにゆかきし御ありさまなれば、おぼし過ぐしがたくて(二二八)」会話を続けた結果、女三の宮をいただくことになつたのであつた。そして結婚してのちの源氏の感想は次のようなものであつた。

姫宮は、げにまだいとちいさく(㉓)かたなり(㉔)におはするうちにも、いといはけなき(㉕)けしきして、ひたみにち若び(㉖)給へり。かの紫のゆかり尋ねとり給へりしおりおぼし出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これはいといはけなく(㉗)のみ見え給へば、よかめり、にくげにをし立ちたることなどはあるまじかめり、とおぼす物から、いとあまり物のはへなき御さまかなと見たてまつり給(二四〇)

また、昼に渡つた際には、

女宮は、いとらうたげにおさなき◎(さまにて、…御いらへなどをも、おぼえ給けることは、いはけなく)㊦)うちの給出でて、え見放たず見え給。(二四七)とある。

これまでに何度となく引用されている部分であるが、問題はここに書いてあることではなく、ここに何かがないことである。

「ここにはない事柄とは、女三の宮の容貌に関するコメントである。」いぶかし・ゆかし」と繰り返してあったのに、その結果が書かれていないのである。藤田加代氏は「本文中に(女三の宮と紫の上との 引用者注)容貌の類似は語られないが、逆に女三の宮の容貌について源氏の失望も一度も描かれていないので、むしろ彼女は、紫上似の美少女ではなかったろうか」と述べられたが、女三の宮が単に美人かどうかが問題なのではないだろう。

「いとあまり物のはへなき」は「あまりにはりあいのない・あまりばつとしない」などと訳されているけれども、ばつとしないのは性格なのだろうか。ここで源氏が気落ちする理由はひとつしか考えられない。息子の嫁にちょうど良くらいの人、自分の娘と言って良い年齢の人と結婚するのに、源氏は一切何を期待していたのか。あの藤壺の面影だろう。ここ

ろが女三の宮の顔立ちは全く藤壺に似ていなかった。源氏が女三の宮の容貌に失望していないから描かれたいのではなく、源氏の失望は表沙汰にはできないこと、藤壺に似ていなくてがっかりしたなどは絶対と言えないからではないか。

「若紫」巻で少女を見かけた時、

ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給。さるは限りなう心をつくしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらる「」なりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。(二五八)

とあった。身元も何も分らないうちから、この子は藤壺に似ているという思いで源氏は少女を見ていたのである。紫の上がどのようであるうとも、何をしようとも、「若紫」巻では許される。紫の上が「いはけなく」ても「何心なく」ても、「つつくしく」「らうたし」である。ところが女三の宮は藤壺の姪であることを知った上で一緒になつてみたら案に相違して似ていなかった。結果、二十五歳年下というところだけが目立つわけである。源氏は女三の宮の「幼稚さ」に幻滅したわけではあるまい。藤壺に似ていなかったから女三の宮がただの子どもにしか見えなかったのである。藤壺への思いは秘密で、誰にも本心を明かすわけには行かない。女三の宮の「幼さ」のせいにしておけば藤壺のことは黙って隠しておけ



るし、自分の誤りに直面する事も避けられるのである。

#### 四 紫の上の場合

源氏と女三の宮との結婚について、初め紫の上は次のように思っていた。

げに、かゝるにつけて、こよなく人にとり消たる、事もあるまじけれど、又並ぶ人なくならひ給ひて、はなやかに生ひ先とをく、あなづりにくきけはひにて移ろひ給へるに、なまはしたなくおぼさるれど(二三九)

しかしその後、女三の宮からの手紙を源氏が、「片そば広げ給へるを、しり目に見をこせ」た場面にはこうある。

御手、げにいと若く(㉞)幼げ(㉟)なり。さばかりの程になりぬる人は、いとかくはをせぬ物をと、目とまれど、見ぬやうにまぎらはしてやみ給ひぬ(二四六)

こつそり筆跡の品定めをしていたわけであるが、まずここで疑問なのは紫の上が「さばかりの程になりぬる人」の筆跡を一体どれだけ知っているかということである。また、「常夏」巻では近江の君の悪筆ぶりが事細かに描かれていたが(二三)、ここには紫の上のことはしかない。

「梅枝」巻で源氏は、朧月夜と朝顔と紫の上の三人を達筆

と認めていた(一六一)。その紫の上の目に十四・五歳の女三の宮の手が「幼く」見えるのはきわめて普通のことではないか。後に、朱雀院が紫の上からの手紙を見てその見事な筆跡に、女三の宮が「いはけなく」(㊱)「見えるだるうと心配する場面があるが、この時点で紫の上に比べて見劣りするの<sup>①</sup>は当然である。紫の上も「若紫」巻では「まだ字は」よからねどむげに書かぬこそわるけれ。教えきこえむかし」と源氏に言われていた(一九六)。それから二十年余の時が経って今日に至っているのである。女三の宮も今でなく二十年後の筆跡を見てやれば良いのだ。ただ、ここで紫の上は安心してに違いない。女三の宮恐るるに足らずと。これ以前、女房達に女三の宮のことを話す時、紫の上は「この宮」(二四二)ということばを用いていたが、後に対面を源氏に申し出る時には「姫宮」(二五七)と呼んでいる。さらに「宮よりも、明石の君のはづかしげにてまじらむをおぼせば」と、あからさまに明石をライバル視して女三の宮は「ついで」扱いである。そして対面してみると、

いと幼げ(㊱)にのみ見え給へば、心やすくて、おとなしく親めきたるさまに：やすらかにをとらなびたるけはひにて(二六〇～二六一)

女三の宮に「絵などの事、ひいな捨てがたきさま」を話す。

先に筆跡で「幼い」と思っていた人が、会ってみてやはり「幼げにのみ」見たので紫の上は安堵している。

この場面の紫の上について、三村友希氏は「大人びた余裕があるからこそ、女三の宮に歩み寄って若さを演じることができる」と述べられたが、余裕のように見えても実はこれはあせり、ごまかしではないのか。ことさら女三の宮を子ども扱いして自分の競争者にはなり得ないことを確認しているような姿勢からは、女三の宮が自分より劣ると思うことで安心を得ている紫の上、もはやそこにしか安心を見出せない紫の上がいて哀れである。内親王という最高の身分の女性に対して、「こんなに幼い人」と言うよりほかに対抗手段がないと紫の上は思っているのだ。斎藤暁子氏は「光源氏の妻」としての女三の宮を無視することで「自尊心を傷つけるものを己が心の中で抹消することが紫上の恥辱を免れる方法であった」としておられる。だがこれは危険な方法で、自ら時限爆弾を仕掛けたようなものであった。どんな人でもいつまでも子どものままではないからだ。物語には描かれない空白期間を挟んで六年余の後、二品に上ってますます重みを増した女三の宮をもはや「幼い」と見下すことができなくなった時に、紫の上は倒れる。

紫の上もまた、女三の宮が「幼い」ことにしておいた方が

良い理由を持っている。

おわりに

女三の宮の「幼さ」を強調することは、朱雀院にとって、年齢的に女三の宮にふさわしい夕霧や柏木ではなく、「親代わりになりうる」光源氏を婿とするのに格好の理由たり得た。亡き藤壺への思いも隠しておけた。乳母も、女三の宮の婿は源氏に決まって欲しいと思っており、その点朱雀院と同様である。一方光源氏は、女三の宮が藤壺に似ていなかったことを秘したうえで宮への幻滅を語るとき、女三の宮の「幼さ」はこれまた格好の隠れ蓑であった。紫の上もまた、女三の宮を「幼い」と見ることで自身の立場を堅持することができた。それぞれ全く別個の理由・心情からではあるが、見事に四人の女三の宮に対する姿勢が合致しているのである。そのため、女三の宮の「幼さ」はことさらに強調されることになってしまった。登場人物が繰り返すことばから女三の宮には「幼い」というレッテルが貼られてしまい、あまり検証されることもなくイメージだけが一人歩きすることになったのではないだろうか。女三の宮はまだ何分にも十四・五歳であるから、父親や乳母には「幼く」見える。光源氏や紫の上のような立派

な大人には「幼く」見える。ただ、そのことと女三の宮を「幼稚」な人間と断言することは別物のように思われる。周知の通り、女三の宮は後に夕霧・柏木に垣間見られるし、さらに後には柏木との事件も起こる。だが、「若菜上」の光源氏との結婚の時点ではそれらはまだ将来に属することからであり、後に起こることもを先取りして女三の宮の性格をあらかじめ決めてしまつような読みには疑問を感じざるを得ない。

あることを証明する具体的な事実がなく、誰かのことばだけが根拠となつていような時、確認すべきなのは話者の信頼性ではないだろうか。人はいつも本当の事だけを口にしていくわけではない。冗談を言つたり、皮肉を言つたり、「ごまかしや嘘などいろいろなことを言う。また都合が悪い時には黙り込むこともある。ことばの使われ方はさまざまである。ある人物が言っていることが正しいかどうか別途客観的に検討すること抜きにその発言内容を鵜呑みにはできない。三田村稚子氏は、女二の宮についてであるが、「幼さ」「いはけなさ」が彼女の「属性や氣質を表わす言葉ではな」いこと、を述べられた<sup>注2</sup>。女三の宮にも同じようなことが考えられるのではないだろうか。

女三の宮は男君からだけでなく、周囲の誰彼からとなく

「若い」ということはを浴びせかけられてきた。紫の上との対面場面の最後に、女三の宮の様子が例外的に地の文で書かれている。

（紫の上が）若やかに聞こえ給へば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き<sup>(R)</sup>御心地にはうちとけ給へり  
(二六一)

女三の宮はこれからも「幼稚」だと言われ続けるのだろうか。

注

注1 田坂憲二「女三の宮と柏木」（『源氏物語研究集成 第五巻』

風間書房 二〇〇〇・四）

注2 岩波『新日本古典文学大系』のページ数。以下の引用部分も

同じ。

注3 乳母の年齢は明記されていないが、左中弁の妹については

「をもをもしき御乳母」という表現や朱雀院に遠慮なくものを言っているところから、少なくとも三十代とみてよいのではない。藤本勝義氏は「女三宮乳母と兄・左中弁」（『源氏物語の想像力』笠間書院 一九九四・四、初出一九八五・一一）で「四十歳前後」としておられる。

注4 池田節子「女三の宮造型の諸問題 紫の上と比較して」

（『源氏物語表現論』風間書房 二〇〇〇・一二、初出一九九一・九、原題「女三の宮」）。望月郁子氏も「イトキナシ・イハケナシ・キビハ小考 源氏物語における「幼少」を意味

する語「(静岡大学教養部研究報告(一)一六二一九八  
一・三)で、「イハケナシ」は「一・二才から十三・四才の子  
供をさしてというのが支配的である」としておられた。

注5

たとえば、岩波『大系』には「年齢に比して幼稚」(二一九脚  
注一二)との記述がある。このように言うためには、少なく  
とも同年齢者集団内での比較・検討を経ねばならなかったの  
ではないか。なお、「常夏」巻には、娘・雲居の雁が昼寝から  
起きたばかりのところを内大臣が見る場面に「何心もなく見  
上げ給へるまみ、らうたげにて、つらつき赤めるも、親の御  
目にはうつくしくのみ見ゆ」(一五)とあった。親の「僻目」  
である。ついでながら、この時雲居の雁は一七歳であった。

注6

日向一雅「怨みと鎮魂 源氏物語への一視点」(『源氏物語の  
主題 「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社 一九八  
三・五、初出一九七八・九)。松田薫氏も、「源氏物語」にみ  
る「物語の論理」女三宮造型の意義をめぐって」(『同志社  
国文学 二八 一九八六・一二)で、「女三の宮鍾愛の理由と  
して、女三の宮の母・藤壺女御の出自の低さからむ、母妃  
への寵愛と「片なり」である女三宮への心配の二点を指摘で  
きる」と述べておられる。

注7

④の話者である「中納言の乳母」が左中弁の妹と同一人物で  
あるかどうか定かでない。ただ④は乳母自身のことばという  
よりは朱雀院のことばの繰り返しと思われるところで、その  
ように解すれば使用者は朱雀院と分類することもできる。こ  
こでは左中弁の妹について考える。なお地の文とした二例の  
うちの⑤は「乳母たち」の視点から書かれたものと読むこと  
も可能か。

注8

久保重「朱雀院女三の宮の乳母たち」(『源氏物語の探究 第

一五輯』風間書房 一九九〇・一〇)  
藤本、注3に同じ。氏が理由とされたのは「乳母らが、いか  
に理想的男性でもあと十年生きるかも定かでない源氏を志向  
する(源氏の方では降嫁にあたってこのことを気にしていた)  
のは、女三宮のこれからの長い将来を考えるとやや疑問を感  
じる」点であった。

注9

池田、注4に同じ。

注10

曾根誠一「女三の宮 悲劇のヒロイン」(『国文学解釈と鑑賞  
二〇〇四・八)

注11

高木和子「若菜巻発端の論理」(『源氏物語の思考』風間書房  
二〇〇二・三、初出二〇〇一・四)

注12

森一郎「若菜上・下巻の主題と方法 内的真実と外的真  
実」(『源氏物語の表現と人物造型』和泉書院 二〇〇〇・  
九、初出一九九九・九)

注13

「そこまで描く必要があるかと思われるほど」：ひどく念入り  
に特徴的に書き込まれている(久保、注8)とか、「奇異に  
すら思えるぐらい」「乳母の発言は長大」(森、注13)などと  
この乳母の発言がとらえられるのも、乳母が本心を隠して何  
とか自分の思う方向へ朱雀院を引っ張って行こうとしている  
ためと考えられる。

注15

今は通説に従ってこの理由にしておく。たとえば斎藤暁子氏  
は「紫の上の挨拶」(『源氏物語の研究 光源氏の宿痾』教  
育出版センター 一九七九・一二)で、女三宮を「第二の玉  
鬘にしまい」との源氏の気持ちを描いておられる。

注16

なお、これらの場面で決定的に欠落しているのは女三の宮が  
夫となった二十五歳年上の光源氏についてどう思ったかとい  
う点である。何よりもこのことが論じられなければならない

注17

と考えているが、今はおく。

注 18 藤田加代「あえか」のイメージ 女三の宮の造型に関連して」

(高知女子大学保育短期大学部紀要 一四 一九九〇・三)

注 19 それぞれ小学館『新編日本古典文学全集』、至文堂『源氏物語

の鑑賞と基礎知識 若菜上(前半)』

注 20 三村友希「源氏物語 幼さをめぐる表現と論理」(『源氏物語

と日本文学研究の現在 身体・ことば・ジェンダー』フエリ

ス女学院大学 二〇〇四・三)、「研究史 紫の上物語の生成

紫のゆかりの糸を手繰って」(『人物で読む源氏物語 第六巻

紫の上』上原作和編 勉誠出版 二〇〇五・六)

注 21 齋藤、注 16 に同じ

注 22 三田村雅子「夕霧物語のジェンダー規制 「幼さ」・「若々し

さ」という非難から」(国文学解釈と鑑賞 二〇〇四・八)

〔謝辞〕

十年來お付き合い合っていた鹿兒島市城西公民館「源氏を  
読む会」会員の皆様、いつも貴重なご意見と励ましを下さりあり  
がとございます。

(いさやま じゅんこ・鹿兒島女子短期大学助教授)